

都市を見るまなざし

フランクル・アリオナとエステルハージ・ペーテルのブダペスト

早稲田みか

2009 年は、日本とハンガリー（当時はオーストリア・ハンガリー帝国）の間で最初の外交関係が成立してから 140 周年、また第二次大戦後、新たに日本とハンガリーとの間に外交関係が回復してから 50 周年という記念の年であった。

この友好を記念する年にちなんで、日本国内でもハンガリーを紹介するさまざまな催しが行われた。2 月には現代ハンガリー文学の旗手エステルハージ・ペーテルが、10 月には写真家フランクル・アリオナが来日し、それぞれシンポジウムと展覧会が催された。

ハンガリーはヨーロッパの中央部に位置する小国である。波乱に富んだ歴史と豊かな文化をもつ魅力あふれるこの国の首都ブダペストは、「ドナウの真珠」とも「ドナウの薔薇」とも形容されるすこぶる美しい町である。

そして、作家エステルハージ・ペーテル（1950 年ブダペスト生まれ）も写真家フランクル・アリオナ（1954 年ロシア生まれ）も、それぞれ小説、写真と手段は異なるものの、独自の語り口と視点によって、都市ブダペストを描いている。ふたりの描きだすブダペストは、通りすがりの観光客の目には見えない重層的なブダペストだ。わたしたちはそこに、ブダペストという都市の隠れた秘密をかいま見ることができる。

ロシアのノヴォチェルカスク（黒海沿岸）に生まれたフランクル・アリオナは、留学生としてハンガリーにやってきた。1980 年にブダペストのエトヴェシュ・ロラード大学文学部（英語・ロシア語専攻）を卒業し、1987 年から写真家として活動している。

彼女がカメラを向ける対象は、ブダペストの職人や、カフェ、ユダヤ人街、墓地などである。時代の変遷のなかでしだいに消え去りつつあるブダペストの街角の光景を、主としてモノクロの写真に定着し続けている。

たとえば、ハンガリー語で「プレッソー」と呼ばれる喫茶店。ハンガリーが社会主義体制の下にあった時代には、コーヒーを飲んでちょっと一息つく場所として町のあちらこちらにあったものだ。1990 年の体制転換後、おしゃれで明るくモダンな内装のカフェが次々とオープンするなか、ほの暗くて煙草の煙が充満するプレッソーは、時代遅れのしろものと化して、つぎつぎと消滅していき、今やほとんど残っていない。

ドナウ川右岸ブダ地区のフランケル・レオー通りにある「バンビ」は、今なお余命を保っている数少ないプレッソーのひとつだ。日本でいえば、昭和の香りただようレトロな喫茶店というところだろうか。休日の昼近くともなると、待ち合わせの老若男女が多勢集まってくる。こぎれいで高価なカフェばかりの昨今では、このいささかあかぬけないカフェがかえって人心をとらえる存在となっているらしい。若者もふくむ多くの人々にとって、それは子ども時代を思い起こさせる都市装置の一部になっているのだ。

フランク・アリオナはインタビューで、「わたしはブダペストの写真を撮るブダペストの写真家です」という。そして、「わたしは古いものに惹かれるのです」、「わたしが古い世界が好きなのは、そこに時間の流れが感じられるからです」とも語っている。

『消え去り行くブダペスト』（1994年）と題された一冊の写真集がある。フランク・アリオナと彼女の師である写真家ルゴシ・ルゴー・ペーラのふたりの作品を収めた写真集である。そこには、自分が製作したバイオリンを手にする職人や、足踏みミシンの前に座る仕立屋、靴屋、額縁屋といった年老いた職人たちがいて、静かにまっすぐカメラにまなざしを向けている。今ではもう消えてしまった古い世界、一昔前のブダペストがひっそりとそこに息づいている。

それは都市に隠された秘密のひとつだ。歴史のある都市はそうした秘密をたくさんかかえこんでいる。そして、ちょっと目には見えないけれど、それこそがその都市の真の魅力をつくりだしているのである。フランク・アリオナの写真をじっと眺めていると、いわれもなくひどく懐かしい気分におそわれる。そこには消え去っていくものにたいする、去りゆく時間にたいする、やさしくも透きとおったまなざしがある。

そうした消えゆくブダペストの光景をとらえた写真群は、単なる歴史的な記録以上のものだ。フランク・アリオナは、人や物の中にブダペストを見る。たまたま人物が写っていない写真でも、そこにはつねに魂あるものの気配が感じられる。どの写真にも、写真を見ているわたしたちをまっすぐに見つめかえすまなざしの存在が感得される。写真の背後で、まるで小説のように、歴史やストーリーが呼吸しているようなのだ。

フランク・アリオナの写真は、過去を激しく想起させる。緩急さまざまな凝縮された時間の流れを目に見えるものにする。それは、とどめようもなく変化していくもの、過ぎ去り行くものへのオマージュだ。

彼女はインタビューのなかで、こうも語っている。

「わたしは自分の家に表札をかけません。家や建物のほうが変わることなくずっとそこにあって、わたし自身はたまたまこの瞬間にそこにいるにすぎないと感じるからです」

ところで、この写真集には作家エステルハージ・ペーテルが序文を寄せている。そこには、こんな一節がある。

「これらの写真に映っているもの、それはベデカーに載っているような町ではない。そう、ルゴーとアリオナは「見えない都市」について語りかけているのだ。……年老いた職人たちの顔、失われゆく世界の最後の瞬間をとらえた写真。……私たちの人生の一部だった世界はもう写真のうえにしか存在しない。……これらの写真はノスタルジックなものでも、悲劇的なものでもない。ただ過ぎ去るということはどういうことを語っているばかりだ」

エステルハージは小説『ハーン＝ハーン伯爵夫人のまなざし』（拙訳、松籟社、2008年）のなかで、自分の生まれ故郷の町ブダペストを描いている。この小説の主人公は「プロの旅人」である。雇い主の依頼をうけて、ドイツの黒い森に端を発し、中央ヨーロッパを縦断して流れ、やがては黒海へと注ぎこむ大河

ドナウ川を、上流から下流に向かって、国から国へ、町から町へと旅をする。ドナウエッシンゲン、ウルム、レーゲンスブルク、パッサウ、ウィーン、そして、ブダペスト。

ブダペストを描いた一章（第 19 章）は「見えない都市」と題されていて、イタリアの作家イタロ・カルヴィーノの長編小説『見えない都市』のパロディーになっている。カルヴィーノの『見えない都市』では、マルコ・ポーロが皇帝フビライに自分が見てきたさまざまな町について語って聞かせるのだが、最後になってそれらの描写はどれも自分の生まれ故郷の町について語ったものであることが明かされる。

エステルハージはカルヴィーノの文体をかりて書いている。

「今日あるがままのブダペストを描きだすということにはまた、ブダペストの過去のいっさいが含まれているはずでございます。しかし都市はみずからの過去を語らず、あたかも掌がいくつもの手相線を秘めているように、通りの角、窓の格子、階段の手すり、避雷針、旗竿などに過去を刻み込みながら、自らのなかにその過去を秘めているのでございます。すべての線には、さらに新たなひっかき傷、のこぎりの痕、のみの刻み目、小さな線が刻みこまれていくのでございます」

フランクル・アリオナも都市ブダペストの像を印画紙の上に定着させることによって、その背後に潜む歴史を描いている。目には見えない歴史のうごめきを一枚の画像に定着させている。フランクル・アリオナの写真は、じっと見つめると、むこうから何ものかを語りかけてくる、まるで小説のように饒舌に。そこにあるのは、濃縮された時間の姿にほかならない。

それなら逆に、小説もまた、写真であるとはいえないだろうか。

作家エステルハージ・ペーテルに、小説を図像化した作品がある。

作曲家ハイドンを召しかかえていたハンガリーの大貴族エステルハージ家の子孫で、ヨーロッパ中に読者をもつこの作家は若い頃、前衛的パフォーマンスのような活動をしていたことがある。ある小説を一枚の紙に書き写し、それをひとつの作品としてさしだしたのである。

それは、自身が敬愛するハンガリーの作家「オトリク・ゲーザの 70 歳の誕生日のために、1981 年 12 月 7 日から 1982 年 3 月 15 日の間に約 250 時間をかけて、縦横 79×57 センチの用紙に、『辺境の学校』〔長編小説〕を書き写した」ものである。長い小説だから、当然、一枚の紙には収まりきらない。一枚を使いきると、続きはすでに文字の書かれた上に重ねて書き写していくことになる。これを幾度も反復していくと、文字と文字とが重なりあって、紙面は映像の映っていないテレビ画面のようなざらざらとした灰色になる。この作品は、エステルハージの『純文学入門』（1986 年）と題する大作のなかに、作品の一部として収載されていて、そこには「風景としてのテキスト」という言葉が添えられている。文字は幾重にも重なりあって、もはや読むことはかなわないが、それでもそこにはまぎれもなくオトリクの小説が隠匿されているのだ。文は図像（あるいは写真）と化しているが、そこには文字、文が凝縮されている。そこには幾層にも凝縮された物語がある、時間の流れが幾層にも凝縮されたフランクル・アリオナの写真のように。

こうして、写真と文学の境界はひどくあいまいなものとなる。

興味深いことに、エステルハージ・ペーテルとならんで現代ハンガリーを代表する作家ナーダシュ・ペーテルも、作家となる以前はフォトジャーナリストとして生活していた。現在でも写真の個展を催して、現役の写真家としての活動も続けている。

さらにいえば、ハンガリーは小国ながらあまたの優れた写真家を輩出した写真大国である。アンドレ・ケルテース、ブラッサイ、ロバートとコーネルのキャパ兄弟、ムンカーチ・マールトン、モホリ＝ナジ・ラースローなど、20世紀写真史のビッグ・ネームがきら星のように並んでいる。そしてフランクフル・アリオナもその伝統の流れのただなかにある。